

料理人

広東粥の店「粥菜坊」・中国出身の

招しょう杏きょう明めいさん

支援し続けることを考え…

「インターナショナル・フェスティバル」や料理教室でお馴染みの、中原区にある広東料理店「粥菜坊」店主・招杏明さんにお話を伺いました。招さんご夫婦は震災後、とどろきアリーナ、福島県いわき市、宮城県南三陸町、牡鹿半島、石巻市などに炊き出しに行かれました。その後も「被災地食事支援プログラム」を立ち上げ、支援を続けていらっしゃいます。



炊き出しに行くことを決めた時のお気持ちは？

テレビで被災地のニュースを見ていた時、息子が「ママはごはん作れるから行ったら？」と言ったことがきっかけになり、「自分にできることをやろう」という気持ちで行くことを決めました。インターナショナル・フェスティバルや市民祭りなどに来店しているの、道具や手順の準備があり「できる」と思いました。

現地で感じたことは？

被災地は、今まで見たこともないようなひどい有様でした。とにかく自分ができることは、一生懸命料理を作って、被災者の方に温まってもらうことだと思い、目の前の人々のことだけを考えていました。大変な状況の



(左：招さん・右：ご主人)

●『粥菜坊』HP：<http://www.kayunabou.com/index.html>

中、被災者の皆さんがとても礼儀正しく、お互いを気遣う姿に感銘を受けました。

炊き出しの時の状況は？

200kg以上の食材や道具を車に積んでいったため、7時間の行程中、身動きができない状態でした。さらに、内陸部のキャンプ場で16ℓ入りタンク10個に水を入れて運ぶのも大変でした。それでもキャンプ場では、管理人の方の親切でお風呂に入ることもできました。私にはいつも神様がそばで見守っていてくれると思いました。



NHKや中国CCTV(国営放送)の取材が来ていたそうですね。

6月初旬でした。南三陸町名取(なとり)での炊き出しの様子が、宮城放送のニュースで流れました。その地域はそれまでほとんど報道されていなかったの、皆さんとても喜んでくれました。

また、炊き出し活動についての中国での受け止め方は、日本とはかなり違います。「どうして利益にならないことを危険な場所とするのか？」という質問を受けます。私たちは今、ご飯も食べられるし困っていることありません。できるからやるのです。それはお店が順調であり、お客様がたくさん来てくださるお蔭です。皆さんの代表で行っているという思いです。

川崎に戻られた今、被災地への思いは？

夢の中にも炊き出しの場面が出てきます。「助けに行きたい。」という思いが常にあります。炊き出しはその場で終わってしまうことなので、これからも支援し続けることを考え、「被災地食事支援プログラム」を立ち上げました。(詳細はホームページで)被災者が困らない状況になるまで頑張ろうという思いで続けていきます。

招さんは、お互いに自分より相手が大事と考えることで結婚生活も長く仲良くやっていけるとおっしゃっていました。愛情豊かなお二人から発信された支援の輪がこれからも広がっていくことを願っています。

(取材・文：編集ボランティア 相沢明子)